

# 卯土はんのう

第45号

## 加能神社 社殿

### 目次

- ◆『飯能』という地名を推理してみよう..... 高澤 等 ..... 2
- ◆四里餅、味噌付けまんじゅう、平九郎まんじゅうのあゆみ ..... 加藤 寛之 ..... 5
- ◆飯能市史を読んで ..... 渡辺 俊通 ..... 6
- ◆『須田家日記(一)』の『卯日記』(一月~六月)を読んで ..... 和田 強 ..... 8
- ◆岡部忠正と土屋夫人 ..... 関根 貴志 ..... 10

「飯能」という地名を

推理してみよう

高澤 等

私たちが住む町は「飯能」という摩訶不思議な地名で、その語源については古くから様々取りざたされてきた。ここでも答えが出せるわけではないが、新たな「推理」を加えて考察を深めてみたいと思う。

「飯能」の語源として、丹党武士の判乃氏が住んだことから生じた地名であるとするものがある。しかし特定の土地を支配して、その地名が名字化するのが基本的なので、逆に「判乃」という土地に住んだことで判乃氏を名乗ったとみるべきではなからうか。判乃氏が住んだという伝承があるのが現在の飯能市立第一小学校のすぐ南側一帯と推定されている。つまり第一小学校付近が飯能という地名の根源の土地ということになろう。

地元の青年会議所が発行する広報誌は、その題名を「はんなーら」としている。「はんなーら」は飯能市内では昔から「飯能」の語源候補として有力視され、その浸透度はなかなか高いようである。表紙には「はんなーらの語源」と題して奈良時代に関東地区に集められた渡来人たちだが、この地を「はんなーら」と名づけたという説があると書かれている。「はん」とは「大きい」や「偉大な」、「なーら」とは都市や国を表

すのだそう。

自分でも調べてみたが朝鮮語の「ハン(汗)」は偉大なことを表す接頭語らしい。また「ナラ(나라)」は国を意味する言葉である可能性もあり(もちろん同音異義語もあるの注意)、「はんなーら」に書かれていることと同じであった。

しかしながら飯能の市街地は弥生時代から古墳時代の遺跡が希薄な土地で、人が生活を成り立たせづらい土地だったと思われる。こうした土地柄は、「偉大な土地」と云うにはかけ離れたイメージであり、そうした空白地だからこそ渡来人を植させたと思われる。当然「国」と云うほどの土地でもない。この点で違和感のある説である。

明治・大正期の文学博士・田中義成は「その意義は榛野(ハンノ)ならんか。榛は日本書紀萬葉集等によれば、即ち萩のことなるが如し、然らば榛野(ハンノ)は即ち萩野なるに似たり」として、榛では風情がないがハギなら風情があると云う。ハギという植物は改変された土地に生える先駆植物であり、人跡乏しかった土地の名としては今一つ解釈に論理性を感じない。さらに云えばハギの特徴ある濁音部分が消えてしまうというのも如何かと思う。調べてみると「ナラ」について面白い記述を見つけた。『続日本紀』には「踏みならず」を「布美奈良須」、「万葉集」の3546番には「立処ならずも」を「多知度奈良須母」と

書いている。この二つは土地を平らにする平(なら)すことを意味した言葉で、大和国の奈良は古代から平城京の時代まで、奈良盆地を均してきたであろうから、これが語源とも思われる。ただし飯能も同じかと云われれば、飯能が「はんなーら」と本当に呼ばれていたならば、という条件付きの話となる。もちろん飯能が「はんなーら」と呼ばれていたことを証明できるものは何もない。

また別の説としてハンは渡来人「蕃(はん)」の集落を意味することも云う。しかし「蕃」には差別的なニュアンスがあり、もし飯能の「飯」の語源が「蕃」であるとするなら、そこに住む人々が自ら名付けたのではなく、他所の者が上から目線で名付けたものと言えるだろう。だが、その土地に住む人々がそれを甘んじて受け入れて、代々用いるとも思えず、この説も受け入れがたい。これら諸説に対し丘野義幸著『「飯能」の語源について(私見)』(1983年)が、より詳細に検討されており是非とも参考にして欲しい。

### 判乃氏とその館

判乃氏と名乗る武士の居住した土地が飯能の基になる土地であったことは、語源を考える上で大きなヒントになる。判乃氏は鉄文化と密接な武蔵七党丹党の高麗五郎経家の子として系図に記されている。

前述した判乃氏の居館について、



伝・判乃氏館跡

『新編武蔵風土記稿』には「屋敷跡村の東南大泉寺境内の邊をいへり、正親町大納言居住せし所なりと、土手から堀のあと今に存せり」とある。大泉寺跡は、現在は天理教中武分教会となっている。また館跡には出世稲荷神社が鎮座しており、この出世稲荷を東北隅にした約100m四方が館跡だったようである。当地には小字に「内出」があり、これは城郭用語で、館の門を出たところに付けられる地名である。現在、第一小学校南側の歩道の下は暗渠となっており、古くは館の北隅を防御した水堀の役目を持った小河川だったと思われる。堀から発した地

名を「後口堀」といい、「お城堀」が転化した言葉という説もあるが、『飯能市史 地名・姓氏』ではこの説を採っていない。また終戦直後の航空写真を見ると、この堀に沿って土塁の痕跡も確認できる。これらのことで系図に現れた「判乃」という一族が、この土地の名と併せて、大泉寺付近にあった居館跡が判乃氏のものではないかと考えられているのである。



出世稲荷神社

ちなみに『新編武蔵風土記稿』で語られる正親町家について、飯能の民話では安達景盛の妻が正親町大納言の娘という。正親町家は実明(1274-1351)が初代なので、安達景盛が死んだ宝治2年(1248)にはまだ存在していない。

昭和58年に発行された『出生稲荷神社史』にある新井清寿先生の原稿に「市の古老の話しでは、今の体育館のうしろあたりから、観音寺墓地の北側を通り、諏訪堀に流れる深い堀があり、その脇に土手もあったとのことですよ。」と書かれている。

この話は前述した田中義成が『国史の片影』(1920)で著述しており、60数年を経ても語り伝えられていたことが解る。ただ「諏訪堀に流れる深い堀」は飯能幼稚園と観音寺墓地の間に、駐車スペースとして痕跡が残されているが、これは近隣にあった紺屋が排水に用いた堀だという。

飯能を訪れた田中義成は、旅宿の吉田屋から北西に一、二町行った金子獵銃店の店主の父から「近年まで、此の店に並行して、土手の跡を残し、が、畠地を開かんがために、拙者これを崩したり。また、後方の畠地に、御城堀と唱ふる字地あり」と聞き、これが判乃氏の館と判断している。つまり当時の金子獵銃店が面していた道路が判乃氏館の南限であったということだ。

ところで「判乃」という一族は、丹党系図に出てくるだけで、他の史料ではまったく見出すことができない。判乃四郎は正治元年(1119)に起きた鎌倉二代将軍源頼家と安達景盛の対立の際に、安達氏に味方して討死して滅んだと伝えられているが、それを裏付ける史料は存在せず、この話の出所も今一つ解ら

ない。



明治時代(農地変換地図)

**史料上に登場した飯能**

さて飯能に繋がる地名が現れる。確実なものは、天文16年(1547)の「六所宮祭事二付参集覚写」という史料である。「六所宮」とは東京都府中市にある大國魂神社のことで、そこに集まった神主の名簿のような史料である。ここに「半能 聖天神主」と出てくるのが史料上の初見となっている。

この聖天というのは現在の第一小学校敷地の北東隅にあった神社で、飯能の名家である小能家が神主であった。坂戸市塚越の大宮住吉神社の貞享3年(1686)の記録に、聖天社の小能氏が出てくるので、そ

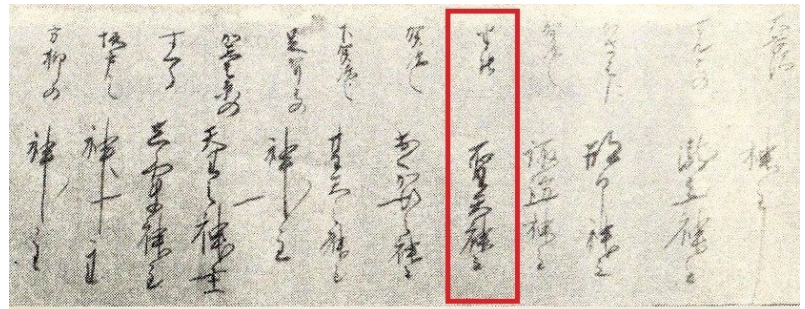
れ以前から小能氏が聖天社の神主として存在していたことが解る。そして江戸時代になると、「飯能」という現代と同じ字面が正保元年(1644)に作成された田園簿に登場することになる。以降、飯能村、飯能町となって近代となり、市の名称となって現代は大字飯能として続いてゆくことになる。

**飯能の語源を推測する**

さて、私自身はどのように考えるかという点、個人的には「製鉄」に関わる地名ではないかと考えている。飯能が属した加治郷、隣接する金子郷も製鉄に関わる地名で、飯能を含む入間川沿いにはタタラノ頭、赤沢、赤工、金山、鍛冶久保、金子、笹井、黒須など製鉄に関わる地名がある。

飯能の語源については「ハンノロ」だったら面白いと思っている。この場合「ハン」とは「畔」で「クロ」とも読み、一般には田の畔を指すが、土を盛り上げることも云う。「クロ」と読むことがあるので、その音を付けた土地の多くは「黒」の文字に転訛した。一方で砂鉄を採る鉄穴流し(かんながし)を行うと、砂鉄が沈んで黒くなることを表すこともある。だから鉄穴流しに用いた水場が「黒田」という地名になることもあった。深谷市黒田の周辺では古墳時代後期から平安時代にかけての鉄滓や製鉄炉などが確認されている。

そして「ノロ」は鉄の精製の際に出る「鉄滓（てっさい・かなくそ・スラグ）」を意味している。  
 狭山市の柏原は鍛冶・鋳物師の土地として有名だが、そこに飯能の旧表記「半能」と同様に「半」の文字を使う半貫という土地があり、半貫山は鉄精製の際に出る鉄滓を捨てた場所だと伝わっている。また当地出身の半貫氏も戦国期に刀鍛冶として知られる。何より半貫に飯能と同じ「ハン」の音が含まれていることは非常に興味深い。



大谷澤 (高麗郡)	神主
せんはの (入間郡・仙波)	瀧之神主
かさはた (高麗郡・笠幡)	刑部神主
賀次之 (高麗郡)	諏訪神主
半能 (高麗郡)	聖天神主
賀次之 (高麗郡)	おくかひ之神主
下賀次之 (高麗郡・蘆荻場)	聖天之神主
足かりはの (高麗郡・柏原)	神主
かしは原の (入間郡・勝呂)	天王之神主
すくろ (入間郡)	しらやま神主
坂戸之 (入間郡)	神主
方柳の (入間郡)	神主

六所宮祭事二付参集覚写

そして大字飯能の領域で、製鉄や鍛冶が盛んであったようで、久下の東側に多い「入子」という一族は柏原鍛冶であった。入子氏は、天正7年（1579）に北条氏照が発した鍵の納入を命じた史料に名が出てくることから、刀鍛冶であったことが解る。製鉄・鍛冶には燃料材として大量の森林資源が必要だが、字入子を含む久下分村は、戦国時代に大河原から苗台に向かう山々（深沢・長尾根）の権利を有していた。  
 鉄を生産する民が信仰する神は、

金屋子神、茶吉尼天、牛頭天王（八坂神）、愛宕神、秋葉神、金比羅神、山祇神、諏訪神、金山彦神などであり、これらのほとんどが現在の大字飯能、特に天覧山から発する諏訪沢周辺で祀られている。  
 飯能河原周辺が砂鉄の採集に適した土地であり、それを原材料にして生業を立てた民が古くから住んでいたのではないかと思う。  
 砂鉄の採取は、崖を切り崩すことで大きな地形改変を伴うが、久下の崖は自然浸食だけではなく砂鉄の採掘による部分もあると思われる。また飯能河原の地形は初期精製を



久下周辺地形図

行うにも都合の良い地形でもある。「半能」と呼ばれた土地と久下はごく近い距離にあることも想像をかき立てられるのである。  
 飯能市という土地は鍛冶・製鉄に関係した加治氏が住んだ加治郷だけに、そうした意味を纏った集団が飯能の地に移り住んだことで、「飯能」という地名が生まれたのではなからうか。  
 以上は語学不案内な者の語呂合わせであり、コジツケと云われれば返す言葉もないが、鉄に関わった丹党武士が本拠を置いた加治郷の歴史を鑑みれば、なかなか面白いので

はないかと思う。以上のことから、その意味は置いておくにしても、「ハンノウ」は製鉄・鍛冶に由来しているのではないかと考える。



加能神社(旧聖天社)

明確な答えが出せない内はどのような説を唱えても問題はない。そして一つ一つの可能性を否定して消してゆく作業も歴史を学問として深化させてゆくには重要なことであろう。これを読んだ皆様も、独自に「飯能」の語源を推測してみてもよろしければご教示頂ければ嬉しく思う次第である。

(日本家紋研究会会長、  
当会副会長)

四里餅、味噌付けまんじゅう、  
平九郎まんじゅうのあゆみ  
加藤 寛之

近年は、名物といえば食べ物と思うようになりました。名物の多くには、物語や伝統、その土地らしさがあります。ここで取り上げる四里餅、味噌付けまんじゅう、平九郎まんじゅうは、どうなのでしょう。ハッキリとした証拠でなくても、そこは甘くお許しください。

#### 四里餅

四里餅は大里屋の商品です。飯能商工会議所の「飯能ブランドDAI N E開発ストーリー」は、「江戸時代、名栗川では山から切り出した木材を筏に組み、盛んに流送が行われていました。流送を行う筏乗りが、茶店で売られている餅を食べたら、四里の急流を転覆せずに乗る切ったと伝えられており、その餅が「四里餅」の由来となっています」と紹介しています。

四里餅の報道は、飯能青年会議所「ミニニュース飯能」昭和54年4月8日号が初期のものでしょう。「今から100年前、名栗川を下る筏乗り達が吾妻峡近くでこの四里餅を食べて、しりもちをつかずに筏をあげた、といったところから作られました」とあって飯能ブランドと似た内容です。ほかに二つ例示します。

「飯能市民新聞」昭和58年10月2日号は、「今の四里餅を発売したのが(昭和)25年頃。見慣れぬ目には途方もなく巨大な餅に見えた。はじめは無名だったが、そのうちに名が付けられ、その名も「四里餅」として親しまれるようになった。その昔、四里の激流をこの店で餅を食べ、しりもちもつかずに難所も乗り切ったという話から名付けられた」とあります。四里餅の始まりが江戸時代から終戦後になっていきますし、初めは大きく、無名だったとあります。

「文化新聞」平成19年4月10日号には、「創業当時は永田のまんじゅう屋として知られ、四里餅は、やはり創業当時から人気があった大福餅。『でつかいもち』と呼ばれて親しまれていた。『名前を付けなければ勿体ない』と。近くの入間川を下る筏流しにちなんで、インパクトのある名に命名された。帰りに吾妻峡付近の茶屋に立ち寄り



四里餅

り・・・、筏師はいつもこのもちを食べていた」とあります。永田のまんじゅう屋と吾妻峡付近の茶屋は別のようなです。四里餅の誕生は創業時で、名前は商品性を意識したもの。食べたのは筏流しの帰です。

四里餅の由来には揺れがありますが、名物としての物語なのでそれでよいのでしょうか。昔の四里餅は大きかった、とよく言われます。これも、お土産には持ち帰りやすさや小分けしやすさが大切だからで、その変更で四里餅はお土産化に成功したといえるでしょう。

なぜこの餅を食べたのかですが、それは甘かったからだ、と私は考えています。西村一男『ふるさと漫録』(奥武蔵原市場の今昔)(平成11年)に「大正五・六年のころ：所沢でも青梅でも、まんじゅうが好きで買ってみたが、いずれも中は塩餡だった。原市場だけは甘餡のまんじゅうがとぶように売っていた」というのです。原市場近辺は甘い餅が食える生活の豊かな場所だったのでしよう。

#### 味噌付けまんじゅう

以前に飯能市のホームページにあった紹介文には「味噌付けまんじゅうは、江戸時代に西川材をいかだで運ぶ職人達が弁当として食べていたのが起源といわれています。蒸した酒饅頭を、夏場でも腐らないように表面に味噌を塗っていた事が

味噌付け饅頭の起源といわれています」とありました。調べてみると、味噌付けまんじゅうの表記はバラバラです。味噌付けまんじゅう、飯能みそまんじゅう、飯能まんじゅう、みそつけまんじゅう等々、わかればいいんだ、くらいのもんです。「文化新聞」昭和61年4月20日の「古い時代と話し合う会」では、「どこで作り始めたものか話合ったが、はつきりしなかった。：中に塩餡もあったかと思う」とあります。いつのまにか売っていた食べ物で、その昔は餡が甘いとはいえなかったようです。「夏場でも腐らない」は一説にすぎません。餡がない群馬の焼きまんじゅうを考えると、味噌付けは甘味に代わる味ではないでしょうか。なお私は弁当云々の根拠が分かりません。味噌付けまんじゅうの呼称の一つに、飯能まんじゅうがあります。



味噌付けまんじゅう

「埼玉新聞」昭和25年4月14日号が「観光飯能町の土産品といえば先ず赤ちゃんグング、甘酒まんじゅう、みそまんじゅう等があげられるが、これらの土産品は戦時中原料難のために姿を消してしまっただけ、うち甘酒まんじゅうだけが同町の一老舗で再び製造されるようになり、飯能まんじゅう」と名づけて十年振りに復活、最近各地から押寄せせる遊山客の人気をさらっている」と報じています。このときの飯能まんじゅうは甘酒まんじゅうだったのです。一老舗とは、新島田屋でしょうか。味噌付けまんじゅうの類は、日高市や青梅市のお店でも現行商品です。飯能名物というには独特のものでなく名前も統一していないけれども、飯能に古くからある美味しい食べ物、ということでしょう。

平九郎まんじゅう

もとは廃業した島田屋の商品です。現在は中山茶屋が同名の商品をイベント限定販売しています。由来は、「文化新聞」昭和27年3月15日にあります。島田屋の島田卯之吉が振武軍の立てこもる能仁寺に入り、まんじゅう好きの渋沢平九郎が明治9年5月23日朝に陣笠などを卯之吉に与えました。その後、家伝のまんじゅうに平九郎の名を冠して売ったというのです。いつとはなく製造をやめ、孫である四代目の島田利重氏が復活させたというもの。それは白色で一口サイズ、「平

九郎」の焼印が押してあったそうです。

復活のきっかけは、城西大学経営学部の辻ゼミナールが平成30年に新島田屋とコラボして「平九郎まんじゅう」を限定復活させたこと。新島田屋の提案は茶まんじゅうでした。これをヒントにNHK大河ドラマ「青天を衝け」にも触発され、令和3年に奥むさし飯能観光協会がなぐり特産品協議会へ平九郎まんじゅう製造を打診、復活しました。大きさは8×9センチほどでしたから名栗まんじゅうのパッケージ換えてでしょうか。

現在は焼印が中山茶屋にあるところで、平九郎まんじゅうはイベント等での限定販売だそうです。白色で一口サイズなので、島田利重氏が復活した平九郎まんじゅうを模したものでしょう。脚光をあびた渋沢平九郎ですが徐々に意識は薄れ、その名を冠した商品も限定販売になったということでしょう。



平九郎まんじゅう

名物やお土産は、その理由がありません。地元で愛されてきた食べ物には歴史があります。とりあげた3つの美味しいものには、それぞれに歩んできた味わいが入っています。ぜひ、一口どうぞ。

(地域研究者、当会会員)

飯能市史を読んで

渡辺 俊通

今から三十八年前妻の実家にあった一冊の本を読んで感銘を受けました。事典のような厚さの『飯能市史』でした。飯能郷土史研究会の主要メンバーの人達の情熱と郷土愛、それにもまして、大変な努力の結晶だと思いました。私も中学一年生の頃より歴史に興味を持ちテーマを決めて調べたり、疑問に思うことや、地質、言語、風土、気象、考古学上の遺物(ヤジリ・石器・土器・日用品など)、色々な物やふしぎな事象など図書館や書店などで本を読み必要に応じて買入したりして調査研究を独自で続けて来たので『飯能市史』一冊の資料は膨大な量になると一目で解りました。そしてこの会の人達の力量も知りました。それと同時に会に入って勉強したいと強く想ったのでした。数拾年後、縁あって入会が出来ました。そして会報に載せる原稿を書いてくれと言われ光栄の至りです。

それでは私の調査研究を発表させて頂きますが、正規の歴史でなく一般の歴史好きのおじさんです。ゆえに文章も、調査・研究も独自の見解ですので、正史と合せ観てもらえれば幸いです。

序章 日本列島の成りたち

今より三千万年前、つまり新生代第三紀の五区分の三番目の時代漸新世(三四〇〇万年〜二三〇〇万年)に始まった。大きな大陸の北東の端の地割れが始まりである、中新世(新生代第三紀中五区分の四番目)二三〇〇万年〜五三〇〇万年前までにかけて約一八〇〇万年の時間をかけた、大陸プレート、太平洋プレート、フィリピンプレートの運動に依り大陸から分れた部分が太平洋側にズレて島が数個出来た。その後太平洋プレートとフィリピンプレートの間に今の伊豆諸島火山帯が出来た。プレートの動きと火山帯の火山の噴火と太平洋プレート、フィリピンプレートの運動で本州の中心部を創り出した。そこに火山活動が本州各部に起こり、北アルプス、中央アルプス、紀伊半島、などでカルデラ噴火が起きた。紀伊半島、北アルプス爺ヶ岳はその噴火で高サ一万メートルの山に成ったと思われる。

も北の千島列島經由、オセアニア諸島より沖繩へ、フィリピン諸島より日本列島へ、中国雲南省あたりの人、朝鮮半島經由など、大きく五方面より更新世にやって来ている。

今より三万年弱の頃より日本列島にやって来た沖繩の港川人(二万三〇〇年)、北海道、東北などの旧石器遺蹟、群馬県北部の旧石器遺蹟などの出土により一万四三〇〇年前には日本各地に旧石器遺蹟が出土している。

他に地層、断層、岩石などから地質年代と放射年代(絶対年代)、相対年代がある。更新世は人類の進化が特筆された時期(生物史上)。つまり日本列島に日本人の祖先は大陸北東部より千島列島經由で日本列島にやって来た北東アジア(ロシア系)人種がDNA検査によると最も有力であると思われる。つまり北東アジア(ツングース圏)より来た人種と南方オセアニア諸島系沖繩人が原初であると言える。フィリピン諸島系のDNAも二つの断片が認められる。近年の化学で解明された結果を合せ考えるに、人類の移動の結果、北東ロシア系とオセアニア系人種と中華系と朝鮮系、フィリピン系の五種の混血で最初の日本人(旧石器・縄文人)だったのではないかと思われる。その後次々とアジア系の人々が日本にやって来て現在の日本人と成ったのではないだろうか。飯能市の太古から、今より二万年前より一万年頃まで何回となく冷

暖をくり返した。氷河期の中でも暖期と氷期が交互におとずれた時期、約一万年の間に何回もあった。地層が入り組んで海地層と河床礫の礫層、海が退いて陸地になり谷が出来、その後海進が始まり川越くまで海になっていった。そして海が後退して氷河が押し出した土砂により埋れた地と考えられる。それが言えるのは縄文早期、前期の貝塚にハイガイが多く、中期・後期・晩期にはハイガイが少なく、ハマグリが多くなっている。ハイガイの生息地は比較的、暖かい地方が多い。この頃の東京湾には多種類の造礁サンゴも生育していた。つまり縄文時代早期から前期にかけては、日本は今日よりも暖かかったのではないかと考えられる。(ハイガイ(灰貝)の今の生息地は三河湾以西の浅い海に多い。)

飯能地域の縄文遺蹟の分析

- 高麗川・入間川・成木川・南小畔川流域の四つに大別出来る。
- 一、高麗川とその支流沿いの河岸段丘・丘陵・山地。
- 二、入間川流域・平地・市街地から南東部にかけての河岸段丘に点在する。
- 三、成木川・直竹川沿いの台地・丘陵上にある。

四、北東部を流れる南小畔川・小畦川支流の河川沿いの台地・丘陵上にある。



旭原遺蹟全景(東から)  
 (『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第324集』、平成18年3月、埼玉県埋蔵文化財調査事業団より「図版22 飯能市上町東/旭原」)

飯能遺蹟は右記のほか各所に年代別に点在します。現在も時代区分に応じて発掘調査をしています。これから先も続いて行くと思います。今回の原稿はここまでと致します。

「序章」第一章、第二章、第三章、四章、五章、六章、と続きますが、「日本史」と平行して地方史として、近隣の郷土史も飯能史に関連した事柄も含めて記述して行きたいと思っています。機会あれば又書かせて頂く事もあると思います。

(当会監事)

『須田家日記(一)』の『卯日記』  
(一月〜六月)を読んで

和田 強

二〇二〇年に飯能市立博物館から、『須田家日記(一)』(翻刻版)が刊行されたので、昨年初めあたりから口語訳をしながら読み始めた。しかし、けっこう難航した。何とか三年分を読み終えたが、不明な部分が多くなり、今後の宿題として残っている。今後それらを明らかにできたらと思っっている。

今回は、『卯日記』(天保十四年)の一月から六月まで、当時の小瀬戸村を舞台に、村運営上の出来事や事項を取り上げて話題提供としたいと思う。不明箇所に加え読み違え等もあるかと思うので、お気付きの節はご教示いただきたい。後日、また機会があったら、続編をと考えている。



須田家日記  
(飯能市ホームページより)

【武兵衛は著者なのだ】

この日記の著者は、須田武兵衛で、精道とも号している。日記に描かれている天保十四年は、武兵衛の父の久馬太郎が、年番で名主を務めており、倅の武兵衛はこの年二十二歳である。武兵衛は、十代で医学を学び、医業の傍ら寺子屋も開き、近隣の子どもに学問を教えていた。(『須田家日記(一)』解説より)

日記には、確かに医学に関わっているという生活ぶりだが、わずかであるが、見て取れる(後述)。この点で、武兵衛がこの日記の著者であることが分かる。しかし、それらを除けば、あとは、名主である久馬太郎が行った村運営に関する記述がほとんどすべてである。

これはどういうことであろうか。父久馬太郎の村運営の務めぶりを武兵衛が日記に綴り、名主須田家の記録としたものだろうか。それとも、父久馬太郎の名代として、武兵衛が村の運営に携わっていたということなのであろうか。この点がはっきりしない。

ともあれ、武兵衛が日記として記録した、名主須田家父子(当主久馬太郎と長子武兵衛)の活動を読み取っていくことにする。

【医家としての武兵衛】

「一月二十四日、飯能金子へ薬代支払い」、「二月十五日、野口の子どもの疱瘡湯祝いに招かれる」、「三月十日、病家回り」と三か所記述がある。

る。なお、「疱瘡湯祝い」は、疱瘡が治った子を湯で清めて祝う習俗である。

以下、村運営上の様々な事件・項目を拾ってみた。

【羽織事件】

めでたい元日に事件が起きた。下組の伊右衛門の倅啓助が着ていた羽織が絹小紋で紋が付いていたということ、野口組(上組)の若者四人が取り上げた。伊右衛門は怒り、下組でも寄合をもった。上組の四人は謝罪の意思を示すが、伊右衛門側は収まらず、難航したが八日に決着した。

事件を知った近郷の組合村の村役人から見舞いの言葉を受けたりもした。(小瀬戸村は、清水領組合の「野本押垂組合」の構成村である。組合村は、社会―飢饉に供え穀物を蓄えておく蔵やその制度―の維持を目的とするために構成された。)

当時、幕府は、農村支配のために、農民生活に対して細部に渡り厳しい規制を加えており、衣類についても、分相応なものを着るようになっていた。これに、啓介が違反したということ、この「制裁」を受けたということか。

参考―白子村五人組(帳)前書きに

は、「百姓衣類之儀名主は絹細布木綿 脇百姓は本来綿斗これを着すべし 絹細之類襟帯等も仕間敷候何にても紫紅梅に染申間敷候事」と

記されている。

【御取締役】

前述の、「野本押垂組合」の取締名主を指す。領主の意を受け、配下の村々の監督に当たる。押垂村は現東松山市に属し、小瀬戸村からはかなり遠い。配下の村々へは、回状(回達)を発して指示を行う。(一例としては、小岩井村から回状が届き、その内容を村人に周知したら、苧生村に回達し届けるなど)問題発生の際には、名主や他の村役人が押垂村に参じて御取締役に面会し、協議し指示を仰ぐ。御取締役が回村中の折りに村役人が出向くことも。

日記には、

一月十四日 宗門人別帳の件で伺い書を提出。

二月二十八日〜三月三日(六日間) 押垂村へ参上

三月四日〜五日 御水帳(検地帳や人別帳)の件で申し伺いに出る

三月十八日〜十九日 中新田村(現鶴ヶ島市)へお出ましのところを村役人人事?の件で伺う

三月二十四日 所用処理のため、出府(江戸に赴く)の後、笠山町にて、儀平治(組合村取締役)に面会

六月三日 潰れ屋(経済的に破綻した家)、村人の他行(村を離れ他地域に居ることか)等について、状況を報告する

等々と記述。

【改革組合村・飯能寄場】

改革組合村とは、治安維持、農民統制のために、領主に関係なく、近隣の村々でつくった組合のこと。組合の中心となる村を寄場といい、寄場となった村は回状の伝達や時に取締を担ったりした。小瀬戸村の場合、飯能が寄場となる。

日記には、

四月二十九日 飯能寄場へ火方御取締の御用ということ、小岩井村佐太郎殿のところへ五か村が夜中寄り合う。明日人足を出す  
とある。

【職務】

重要文書管理

宗門人別帳、五人組帳、御水帳（検地帳）などの重要文書の、記載事項の変更処理、調印などを行った。日記には  
三月四日 伊右衛門退役につき御水帳を改めるようにと取締より指示  
三月二十八日 宗門人別帳の調印を触れた  
四月六日 五人組帳調印  
と記述。

山の売買、畑の質入れ・貸借への関与

村人が行う山売買、質入れ・貸借を把握し、その際の証文に奥印を押す。

六月二十四日、山借用の際、年賦で証文を出す、と記述あり。年貢等取り立て

六月七日に、年貢取り立て帳をもとに、夏成り年貢(夏に納める畑年貢)を取り立てた。熊五郎が年貢を納めなかったが、十九日に解決した。とある。年貢とは別に、村入用(村民が負担した村の運営・管理費用。道路・橋の修繕、用水普請、事務経費(紙・墨代)、村役人の給料・出張費、祭祀費用などに使用)、夫銭(領主や村から課される労働義務(夫役：ぶやく)の代わりに、金銭で納める税金のこと)、人別銭(人ごとに割り付けられた金銭)の徴集も行った。(六月三日、六月十二日)

【婚姻】

虎秀村の嘉兵衛の女おふみが、成木村の仁兵衛家に嫁ぐ。久馬太郎と平戸村名主留五郎が間に立って話を進めた。一月二十四日・同二十九日・二月三日・同六日・同九日・同十一日・同十三日・三月十二日・同十四日・同十五日・同廿日・同二十一日・同二十二日と、途中で滞りが生じて丸々二か月かかって落ち着いた。

千ヶ野(高麗本郷村)の半七妹を組の戌太郎の嫁にもらうことを、千ヶ野名主喜四郎と久馬太郎の間で話をし、三月十四日に話が整った。同二十九日に結納の使いを出し、四月

六日に祝儀。と記述。

【奉公人】

他村へ奉公人として出向き、村を離れることもあったのだろうか。野田村(現入間市)の亀吉・亀次郎が、下組のはんを抱えたいと酒持参で挨拶に訪れた。(二月五日、二月十二日)

【飯能商人】

このころ、飯能が経済活動の中心と考えられ、活躍する商人が登場する。

飯能小能あるいは小能伊兵衛  
六月まででは、目にする回数は少なく、七月以降に多出するのでここではさらっと触れておく。金を貸したり、山・畑の売買に関わっている商人と思われる。

六月十九日に、弥三郎の質地を請け戻すために小能を訪れる(主語不詳)という記述がある。

飯能金子  
一月十四日に、武兵衛が薬代を支払ったとあるので、薬種商か。※後の飯能に金子忠五郎が登場する。

また、飯能板屋(一月十日)、飯能小川屋(二月二十三日)の名も見られる。

【野留め・將軍社参】

「野留め」とは、村全体で申し合わせて野良仕事を休むことである

が、日記には、「今日日光御社参二付村内一統野留め祭(四月十七日)」とあり、將軍徳川家慶の日光東照宮への参詣(社参)に伴って、祝賀のため農休日としたことが記されている。四月十七日は家康の祥月命日にあたる。將軍社参は幕府の權威を天下に示す一大イベントで、行列が通過する沿道や周辺の村々では人々が浮かれ騒いだ。なお、これが、徳川幕府の將軍による最後の社参となった。

【信仰】

寺社信仰、民間信仰についてはかなり多く記されているが、一月〜六月では以下がある。

甲子祭り  
六十日に一回訪れ、暦の始まりである甲子の日に行く。農業の繁栄を願ったもの。(一月二十一日)

各地の神社信仰

富士山御師の勧進(一月二十九日)、榛名神社代参のお札(三月八日)、蚕霊山(愛知県豊田市)御師配札(五月四日)、浅間神社：小瀬戸村の鎮守：のお札(六月十六日)など。

【息抜きとして】

酒の贈答

世話になった、迷惑をかけた、よろしく頼むなどの心遣いから、互いに、酒を贈ることがあちこちに出てくる。

大彗星

二月十七日「当節酉月二未申に  
当り天ニ永ク刀如ク雲出西の  
方ニ入柴(ママ)ハ星ナリ」とあ  
って、二月から四月にかけて、  
世界中で観測された一八四三  
年の大彗星を目撃している。彗  
星の尾を雲と見たようだ。

(当会理事)

岡部忠正と土屋夫人

関根 貴志

現在の飯能地域の在り土豪であ  
った岡部氏については、史料も遺蹟  
も失われたものが多く、よく分か  
らないことが多い。例えば小瀬戸の観  
音堂の麓には岡部氏の墓地があり、  
ここには二基の宝篋印塔がある。



小瀬戸岡部氏墓地の宝篋印塔

『飯能の石塔』によると銘は次の  
ようである。

(向かって左側)

明暦二丙申歳

対顔教酬大姉

五月十一日

(向かって右側)

額室淳広居士

永室貞寿大姉

寛文二壬寅歳六月十一日

明暦二年は西暦一六五六年、寛文  
二年は一六六二年である。

この付近、現在の第二小学校には  
かつて岡部氏の屋敷があり、屋敷を  
挟んで東側に阿弥陀堂が、西側に観  
音堂があったらしいが、いまは観音  
堂だけとなっている。ここには至徳  
四年(一三八七)の板碑などがあり、  
また裏山にはいつ頃の築造かはつ  
きりしない山城跡もあり、古くから  
このあたりが岡部氏の影響下にあ  
ったと考えられる。

岡部氏は六弥太忠澄から数えて  
十六代目の忠吉が小田原落城後に  
日影郷に隠棲し、その後小瀬戸に移  
ったというが、この頃に近隣に領地  
を持つ、元武田家家臣の土屋氏・酒  
依氏と姻戚関係を結んでいる。忠吉  
の子の忠正は家康に取り立てられ  
旗本となったが、土屋氏から妻を迎  
え、酒依氏から養子を取っている。  
『寛政重脩諸家譜』には「吉正」と  
いう名で記され、「初忠正」の註があ  
る。これは岳父である土屋昌吉の偏  
諱を受けたものと考えられる。  
その後、忠正は家光の代で江戸に  
移り住んだので、直系の者は小瀬戸  
から居なくなつたという。

宝篋印塔の供養の対象者につい  
ては、『郷土はんのう7号』の「小  
瀬戸と岡部氏」で野口正元氏が推論  
を述べられている。

(吉正は)父親と一緒に小瀬戸  
に移り住んだが、戦場やら江戸  
勤めやらで、小瀬戸に居ること  
はあまりなかったらう。奥方だ  
けは小瀬戸に住んで、吉正を直  
竹の長光寺に葬り、自分は小瀬  
戸に葬られたのではないだろ  
うか。小瀬戸の岡部の墓地にあ  
る明暦二年(一五六八)の墓一  
基(対顔教酬大姉)がそれを示  
しているように思われる

この稿ではこれについて一考を  
加えてみたい。

忠正は寛永五年(一六二八)に、  
父母の供養と、自分たち夫婦の逆修  
のための宝篋印塔を造立している。  
この塔は初め長光寺にあつたらし  
いが、後に杉並区の新井に移され  
ている。この天桂寺は、忠正が寛永  
二年(一六二五)に成宗・田端(今  
の杉並区)の領主となつた後、同十  
年(一六三三)に建立したものであ  
る。(新編武蔵風土記稿では忠正の  
父である忠吉の事績としているが、  
忠正の誤りであろう。後に、長光寺  
に代わって菩提寺となり、孫の忠豊  
から代々の葬地となつた。)  
並んでいる塔に向かつて左側が  
忠吉、右側が忠正の塔になる。忠吉  
の塔の銘は、



天桂寺の宝篋印塔

全室永寿大姉  
月叟同心居士  
施主岡部小右工門尉  
造立之  
寛永五年  
七月吉日

と読める。月叟同心居士は忠吉の、  
全室永寿大姉は忠吉の妻(つまり忠  
正の母)の戒名である。

忠正の方の銘は残念ながら風化  
で読めない箇所が少なからずある。  
誤りがあるかもしれないが、読める  
ところを拾い、読めないところを空  
白にすると、

鳳林山長光寺開基  
□岡部小右工門尉忠正儀  
嶺光法名壽泉居士  
□女土屋氏  
□大姉□□一万  
□□□□□□□□□□  
寛永五年七月吉日

敬白

となる。いずれも寛永五年の建立で  
あり、この頃はまだ忠正は存命なの  
で、逆修塔であることが分かる。  
銘に「土屋氏」「大姉」と読めそう

な個所があるため、こちらも夫妻が  
供養対象になっていいると思われる。  
また、忠吉の塔の左側に「正春院  
殿」の塔が立っている。



塔身正面

基礎の銘は次のとおりである。

寛文貳年

覺

永室貞寿大姉

靈

寅

六月十一日

法号「正春院殿」の上には土屋家  
の家紋(丸に四つ石紋)が彫られて  
いる。つまり、この宝篋印塔は土屋  
夫人のものであると考えられる。忠



土屋氏の家紋  
笹井宗源寺の土屋氏墓所より

正が亡くなったあと落飾して「正春  
院」となったのである。そして忠  
正没後の十五年後の寛文二年に亡  
くなったのではないか。仮に土屋夫  
人が忠正と同齢であったとしたら



銘の写真を階調反転したもの

享年は九十歳であり、多少の年齢差  
があったとしても、相当な長寿であ  
ったと言える。

そして冒頭に触れた、向かって右  
側の宝篋印塔と戒名と年月日が一  
致しており、同一人物であることが  
わかる。つまり土屋夫人は対顔教酬  
大姉ではなく永室貞寿大姉の方と  
いうことになる。

小瀬戸の宝篋印塔を巡っては、い  
くつかわからないことがある。

永室貞寿大姉と連名になってい  
る「額室淳広居士」だが、連名なの  
で一般的には夫妻と考えるのだが、  
忠正の法名は嶺光壽泉居士であり、  
どうも別人ではないかと思われる。  
没年不詳の、夫人に近い縁者なのか

もしれない。正春院の塔には土屋氏  
の家紋が彫られているが、小瀬戸の  
塔は岡部氏の家紋(丸に跳ね十字)  
が彫られている。そのあたりの差異  
にも意味があるように思われる。

もう一方の塔の「対顔教酬大姉」  
についても家譜に出てこない女性  
と思われ、推定は難しい。仮に、も  
し忠正に側室にあたる女性が居た  
としたら、彼女も小瀬戸の屋敷に住  
んでいて、その近くに供養塔を建て  
た、ということかもしれない。

そして、なぜ土屋夫人の塔が小瀬  
戸にもあるのか。

忠正による長光寺の再興には土  
屋夫人の影響もあったらしいこと  
が、梵鐘の銘からうかがえる。これ  
は寛永十五年(一六三八)の、林羅  
山による撰で、一部を引くと

檀越小野姓岡部氏忠正者。六彌太  
忠澄之後也。世在士林。而敬三寶。  
常與其配土屋氏共歎此寺傾側。爲  
薦考妣冥福。遂改造練拏以長老良  
積爲住寺。

とある。誤りがあるかもしれないが、  
意訳を試みると「施主の小野姓岡部  
忠正は、六彌太忠澄の後裔である。  
学問人格ともにすぐれ、三宝を敬う。  
常に配偶者の土屋氏と共に、此の寺  
の衰退を歎いていた。亡き父母の冥  
福を祈るため、遂に禅林を改修し、  
大室良積和尚を住職に迎えた」とな  
るだろうか。また、末尾には

施主 岡部小右衛門尉忠正  
妻 土屋氏

と刻されている。この個所について  
『新編武蔵風土記稿』では

岡部小右衛門尉忠正妻  
土屋氏

と記載されており(おそらく誤記)、  
これを受けてか『飯能市史 資料編  
I 文化財』では「忠正の妻土屋氏は  
寛永15年に鐘を鑄ている」としてい  
るが、撰文も合わせ読むに、忠正と  
土屋夫人が連名になっていると扱  
うべきである。

夫妻がどのようにして寺院の再  
興に着手したのかは想像するしか  
ないが、このような経緯があるから  
夫人も長光寺と関係が深く、亡くな  
った時期はまだ菩提寺は長光寺で  
あったろうし、正春院としての塔も  
あることから、夫人は長光寺に葬ら  
れたと考えることができるのでは  
ないか。

従って小瀬戸の塔は単なる墓で  
はなく、この場所に建てなくてはな  
らなかつた、何か切実な理由がある  
のだろうと思われるのである。

(当会会員)

参考文献

- ・ 関根三郎、『宝篋印塔を訪ねて』、  
創栄出版、平成6年
- ・ 水沢市史編纂委員会、『水沢市史  
3 (近世下)』、水沢市史刊行会、  
昭和56年

※本文の内容を検討するにあたり、  
高澤副会長から多くのご示唆を頂  
きました。あらためてお礼申し上げ  
ます。

表紙の写真について

飯能第一小学校の敷地の北東にはケヤキの巨木がそびえ立っています。この辺りはかつて聖天林と呼ばれ、聖天様が祀られていました。その歴史は古く、応永三年(一三九六)の創建と伝えられています。現存する棟札によると、正保三年(一六四六)に建替えられ、寛保三年(一七四三)と文化十三年(一八一六)に修復されています。



加能神社の棟札

この社殿は、飯能の街中にある現存する建築物で最も古いもので、弁柄の色が今も鮮やかに残っています。飯能戦争の時には聖天林でも戦いが発生し、振武軍方に戦死者があったことが伝えられています(『飯能辺騷擾日記』等)。つまり、この社殿は飯能戦争の生き証人とも言えます。第一小学校建設のために立ち退くことになりましたが、受け入れる寺院が無かったため、諏訪八幡神社境内に「加能神社」として移転しました(明治二十三年)。以来、地元の人々の信仰を集めてきました。

飯能郷土史研究会の活動

◎令和七年度事業報告

▽総会

・四月十九日(土)

講演会

「飯能市域に所在する

近世大名墓の特異性について」

講師 村上 達哉氏

(飯能市立博物館主幹)

▽例会

・六月二十八日(土)

現地見学会

「中山地区を歩く」

(加治神社、智観寺等)



中山信吉墓の前にて

・十月四日(土)

「飯能の名物と菓子 3つのお話」

講師 加藤 寛之氏

(地域研究者、当会会員)

・十二月九日(土)

「怪談で始まる郷土史」

講師 関根 貴志

(当会会員)

※大五田方面、飯能戦争、「宮沢湖の口裂け女」、畑トンネル等にまつわる話をしました。

・二月二十八日(土)

「飯能」という地名を考える」

講師 高澤 等氏

(当会副会長、日本家紋研究会会長、飯能市文化財保護審議委員)

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日 四十五号

◎令和八年度事業計画

▽総会

・四月十八日(土)

講演会

「学校日誌に見る戦時下の飯能」

講師 金澤 花陽乃氏

(飯能市立博物館 学芸員)

▽例会

・六月十三日(土)

「飯能の絵葉書を楽しむ」

講師 加藤 寛之氏

(当会理事)

・八月二十九日(土)

(内容未定)

・十月二十四日(土)

現地見学会(内容未定)

・十二月十一日(土)

「岡部六弥太の奇妙な伝説(仮)」

講師 関根 貴志

(当会会員)

・二月十三日(土)

(内容未定)

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日 四十六号

▽インターネットでの交流および情報公開について

SNS(Facebook)に飯能郷土史研究会のグループを作りました。興味のある方はご参加ください。(https://www.facebook.com/groups/1379468322825755)

これまで発行した「郷土はんのう」について、インターネットで見られるようにしました。ぜひご覧ください。(https://ghosts.xrea.jp/kyoudo\_hannou/)



Facebook



郷土はんのう

訃報

宮沢政雄様

謹んでご冥福を

お祈り申し上げます。

郷土はんのう 第四十五号

発行日 令和八年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒350-0227 埼玉県坂戸市仲町一-二五

一〇〇五(関根方)

電話 090-23322-9349

題字 大野亮弘

印刷所 プリントパック